

令和七年度 一般入学試験問題「国語」

【試験上の注意: 答えはすべて解答用紙に記入すること】

一 次の文章を読んであとの問いに答えよ。

幼児は現在の自己を肯定的にとらえる傾向が強いようです。しかしそれだけでなく、将来の自己についてはとても楽天的なイメージをもっているようです。幼児と接していると、自分が将来どのようなのかという自己の時間的変化について非常に楽天的な見方をすると感じさせられることがよくあります。

A、今はクラスで一番運動が苦手だとわかっているけれども、将来、第二の大谷翔平になれると本気で信じていたりすることがあります。

アメリカの発達心理学者であるロックハート (K. I. Lockhart) らは、日米の幼児、児童、大学生を対象に、望ましくない特性 (意地悪など) をもつ子どもの主人公が出てくる話をいくつか聞かせ、その主人公が大人や老人になるとどうなるかを「とても望ましい状態へと変化」「中程度に望ましい状態 (平均的な状態) へと変化」「望ましくない特性のまま」の3選択肢から選んでもらいました。その際に、それぞれを表現する絵を示しました。その結果、(中略) 日米の幼児ともに、小学生や大学生と比べると、望ましくない特性が望ましい方向に変化すると考える傾向がとても強いといえます。たとえばクラスで一番意地悪な子どもも、大人になると同年代のなかで一番優しくなると考えるのです。

そのうえ、幼児はこうした変化について、特に努力や練習をすることなく、年月の経過とともに自然に生じるものと考えている節があります。(1) こうした幼児の楽天的傾向は「素朴楽天主義」と呼ばれ、文化の違いを超えてみられる可能性が高いと考えられます。

B、児童期になると努力や練習さえすれば望ましい特性へと少しは変化させられるという、「努力依存の楽天主義」へと移行するようです。こうした移行には、さまざまな側面での認知発達が進むという認知的要因のほかに、小学校教育の開始による環境変化 (教科教育やその評価の開始、教師や親の子どもに対するかわり方の変化など) も関与すると推測されます。

重要なことは、この楽天的傾向は、他者に対してよりも自己に対してより強く表れることです。

C 幼児は一般的に「よりよい方向に変遷するものとしての私」という、将来の自己について楽天的なイメージを強くもつと考えられるのです。

この節でみてきたように、幼児は自己の現在だけでなく、将来についても非常に楽天的にとらえています。こうした幼児の楽天性は、社会的比較能力 (他者と自分を比較する能力) の (a) 欠如やメタ認知能力 (自分の認知過程についての知識、自分の認知過程を監視、評価、制する能力) の欠如など、さまざまな認知発達上の **I** に由来するものでしょう。また自分の能力を過大評価することには危険が

令和七年度 一般入学試験問題「国語」

【試験上の注意答えはすべて解答用紙に記入すること】

ともなうこともあります。

しかし一方で、こうした自己理解のⅡが子どもの発達を大いに助ける可能性もあります。(中略) 楽天主義は、以下で述べるように、幼児の発達を支える重要な機能をもつとも考えられています。

ロックハートらは、幼児の楽天主義について「自己防衛的 (self protective)」な機能をもつという考えを提案しています。できないことや失敗することの多い幼児期において、楽天主義は失敗による無力感や (b) 諦めから幼児を防御する役割を果たすのではないかというのです。

このことを、筆者なりにわかりやすく説明してみましょう。子どもは「あらゆる領域における初心者」といえます。子ども時代は、いろいろなことが独力ではできません。D、できるようになるまでに

はそれなりの時間と労力がかかる場合が多いものです。また幼児期は、家庭から園、園から小学校という大きな環境移行を経験し、そこでの困難を乗り越えることを求められる時期でもあります。直面する困難に対して、(2) 幾度となくトライしても克服できないときも少なくないでしょう。大人であれば「自分分はダメ人間かもしれない」「今後できるようににはならないだろう」と気落ちしたり、諦めを感じるような事態でしょう。けれども、大方の子どもたちはこうしたⅢ事態に (c) 陥ることはほとんどありません。何かができなくて悔しい思いをしても、しばらくすると嬉々としてさまざまな物事や人と積極的にいかわり、新しいことへチャレンジしながら、結果的にさまざまなことを学んでいくとも考えられます。

(3) こうしたことを可能にするのが幼児の楽天主義だ、というのです。そもそも自分の「できる」に注目する傾向が幼児では強いとはいえ、失敗が続くことも多く、「できない」自分をⅣせざるをえない状況も幼児では少なくないでしょう。失敗したからといって、αと同じようにいちいち落ち込んでいたのでは、幼児期にふさわしい学びのあり方——好奇心・探究心を発揮しながら人や物事と能動的にかかわること——は難しくなってきましたし、環境移行を乗り越えることも難しくなるでしょう。

このようにみていくと、幼児の失敗や困難を恐れる必要はあまりないともいえそうです。子育て環境の変化や少子化により、育児に慎重になりがちな (4) 昨今です。子どもに失敗をさせないようにあらかじめ手を回すという先回り育児が加速化し、それが子どもの成長の機会を奪うのではないかとのⅤもあります。こうした時代だからこそ、子どもの成長過程は、少々の失敗に対して堅牢であり、失敗経験によってむしろ成長しうるという認識をもちたいものです。

「よりよい方向に変遷するものとしての自己」を (d) 育むにはどうしたらよいのでしょうか。これにはアメリカの教育心理学者であるドュエック (C. S. Dweck) らの一連の研究が参考になります。

令和七年度 一般入学試験問題「国語」

【試験上の注意答えはすべて解答用紙に記入すること】

彼女によれば、一般に知能や能力についての暗黙的信念・態度として、成長的マインドセット (growth mindset: 能力や知能は発達するものである) と固定的マインドセット (Fixed mindset: 能力や知能は固定的で不変なものである) の2種類があるといえます。前者の成長的マインドセットは、「よりよい方向に変遷するものとしての自己」と関連が深いものと考えてよいでしょう。

彼女らの研究をふまえると、大人が日頃の言動を通して「能力や知能は変わりうる」というメッセージを発信していくことが成長的マインドセットを育てるうえで大切だと考えられます。たとえば、何らかの課題を達成した際に、努力やプロセスを褒めることは、このメッセージの発信に相当すると考えられます。一方、能力や知能に言及して褒めることは「能力や知能は不変である」という逆のメッセージにつながると思われます。

ドュエックらが10〜12歳の子どもを対象に実施した調査では、学力テストの結果について努力やプロセスを褒めると、能力を褒めた場合よりもその後の学習における粘り強さや挑戦性、さらには学業成績が高まること示されています。同様の結果は幼児でも確かめられています。

これらの結果は、褒め方によってその後の子どもの学習の様相が大きく異なること、褒め方によってはむしろマイナス面があることを示した点でアメリカの教育界に多大なるインパクトをもたらしました。大事なことは、褒め方により、促進されるマインドセットが異なり、それが粘り強さや挑戦性に VI されると考えられる点です。ここでは努力や過程を褒められると成長的マインドセットが、能力を褒められると β が促進されると考えられます。

褒め方はひとつの例に過ぎません。中学生に対しては成長的マインドセットに沿う考え方をより直接的な方法で教えて伸ばすこともできそうです。数学の成績が下降気味の中学1年生を対象にした研究では、効果的な学習方法に加え、「頭脳は自分の力で伸ばせる」「学習によって脳内のニューロンはどんどん新しい接続をつくっていく」など成長マインドセットに沿う内容を伝えると、その後の学習意欲や成績が (e) 著しく向上することが示されています。

成長的マインドセットに沿うメッセージは大人から子どもに向ける言葉だけでなく、日常での振る舞いや生き方に無意識のうちに表れ出ることでしょう。子どもはそれを注意深く観察して学んでいるとも考えられます。(5) 子どもにかかわる大人自身が能力についてのとらえ方を見なおす必要があるかもしれません。

(出典: 外山紀子・中島伸子『乳幼児は世界をどう理解しているのか』ポプラ社・二〇二三)

出題の都合上、文章の一部及び図・注を削除している

令和七年度 一般入学試験問題「国語」

【試験上の注意答えはすべて解答用紙に記入すること】

問一 空欄 A 〱 D を補うのに最も適当な語を、次の (ア) 〱 (オ) の中からそれぞれ一つ選んで符号で書け。

(ア) たとえば (イ) もちろん (ウ) さらに (エ) つまり (オ) 一方

問二 傍線部 (1) 「こうした幼児の楽天傾向」とは、幼児にみられるどのような傾向のことを指しているのか、簡潔に説明せよ。

問三 波線部 (a) 〱 (e) の語の読みを書け。

問四 空欄 I 〱 VI に入れるのに最も適当な語を、次の (ア) 〱 (エ) の中からそれぞれ一つ選んで符号で書け。

空欄 I	(ア) 逸脱	(イ) 制約	(ウ) 葛藤	(エ) 格差
空欄 II	(ア) 未熟さ	(イ) 傲慢さ	(ウ) 曖昧さ	(エ) 精密さ
空欄 III	(ア) 凄惨な	(イ) 奇妙な	(ウ) 深刻な	(エ) 滑稽な
空欄 IV	(ア) 卑下	(イ) 演出	(ウ) 黙殺	(エ) 認識
空欄 V	(ア) 憶測	(イ) 危惧	(ウ) 嫌疑	(エ) 錯覚
空欄 VI	(ア) 左右	(イ) 分類	(ウ) 反映	(エ) 象徴

問五 傍線部 (2) 「幾度となく」、(4) 「昨今」の意味として適当なものを、次の (ア) 〱 (エ) の中からそれぞれ一つ選んで符号で書け。

傍線部 (2) (ア) 習慣的に (イ) 頻繁に (ウ) 何度も (エ) 何となく
傍線部 (4) (ア) 今日と昨日 (イ) 近頃 (ウ) 日常 (エ) 毎日

問六 傍線部 (3) 「こうしたことを可能にするのが幼児の楽天主義だ」とあるが、それはどういうことか。どのようにして「可能にする」のかに言及しつつ、説明せよ。

問七 空欄 α ・ β に入る言葉を、それぞれ本文中から抜き出せ。

問八 傍線部 (5) 「子どもにかかわる大人自身が能力についてのとらえ方を見なおす必要があるかもしれないません」とあるが、それはなぜか。子どもの発達において筆者の目指すところに言及しつつ、説明せよ。

令和七年度 一般入学試験問題「国語」

【試験上の注意答えはすべて解答用紙に記入すること】

□ 次の文章にある傍線部のカタカナ表記を、漢字に改めよ。

「古屋先生、お疲れ様です」

静かな町並みに明るい声が①ヒビく。

そのまま駆けるように歩み寄ってきた男性は、古びたスーツ姿に紺の中折れ帽をかぶった五十年配の瘦せた人物だ。

「ずいぶん早いじゃないですか。待ち合わせの時間まではまだだいぶありますよ」

「ご多忙の相馬さんを待たせるわけにはいきませんから」

古屋の応答に、「またそんなことを言って」と男性が笑いながら中折れ帽を取った。

帽子の下から出てきたのは、遠目の印象とはずいぶん異なる②ホカらかな笑顔だ。よく日に焼けた肌とあいまって、どこか少年のような雰囲気さえある。

「やっぱり歩いてこられたんですね。いつでも駅まで迎えに行くと申し上げたのに……」

「心配は無用です。私にとっては歩くことが仕事です」

「そうでしたね。それが古屋先生のやり方でした」

にこやかに笑った男性は、千佳に目を向けて③ティネイに頭を下げた。

慌てて礼を返して名を名乗れば、男性は内ポケットから名刺を差し出しながら、

「古屋先生から聞いていますよ。今回は研究室の学生さんを連れていくとね。遠路、お疲れ様です」

千佳が受け取った名刺には、『青森県文化財研究センター 考古学主任 相馬惣七』と書かれている。

「考古学？」

「専門は縄文時代です。青森にはそこらじゅうに縄文期の④イセキがありますから、大学だけでなく県にも研究部門があるんです。私はその古株です」

古株といっても単なる管理職ではないだろう。よく日に焼けた様子は、野外で活発な活動をしている⑤ショウコだということくらいは、千佳にもわかる。